

令和6年度 ADCA セミナー

「国際協力という選択～多様な人材が支える国際協力の現場～」

実施報告書

令和6年10月

一般社団法人海外農業開発コンサルタント協会（ADCA）

1. 概要と目的

我が国の開発途上国への政府開発援助（ODA）の基本方針は、貧困削減のための農業・農村開発分野の協力を重視しており、生産力向上などの農業農村開発を効果的・効率的に実施するために、開発途上国の政策や援助需要を踏まえつつ、我が国の経済社会発展や経済協力の経験を途上国の開発に役立ててきました。また、優れた技術、知見、人材、制度を活用して、貧困削減に向けたプログラムを展開してきました。

海外農業開発コンサルタント協会（ADCA）では毎年、世界の農業農村開発の展開について国際協力の関係者と今後の可能性や方向性について考えるセミナーを開催しています。当セミナーでは、ADCA 会員企業等で国際開発事業に携わっている専門家・技術者の経験を通じて、開発途上国における農業農村開発協力の実績を正しく社会に発信し、次世代のグローバル人材となり得る学生を対象に農業農村開発協力の魅力を伝えることを目指しています。また、世界における農業や食料事情を提供し、我が国の ODA における農業農村開発協力への理解を促進することを目的としています。

2. プログラム

- 日時： 令和 6 年 10 月 19 日（土）13：30～17：00
 - 場所： 〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町 10-5
JICA 市ヶ谷ビル（地球ひろば）6 F セミナールーム 600（オンライン併用）
- 13：30－13：35 開会の辞 久野格彦 ADCA 代表理事（三祐コンサルタント代表取締役会長）
- 13：35－13：45 ODA とは（外務省 ODA 紹介動画とスライドを活用し ODA の概要と仕組みを説明）
- 13：45－14：30 **第 1 部 パネルディスカッション**
モデレーター 鷲野健二 農林水産省 農村振興局
パネリスト 斎藤之弥 日本赤十字社 国際部
大野慧 NTC インターナショナル株式会社
青山健太 日本工営株式会社
山本麻起子 株式会社三祐コンサルタント
- 14：30－14：45 質疑応答
- 14：45－14：50 モデレーターによる総括
- 14：50－15：00 コーヒーブレイク
- 15：00－15：55 **第 2 部 グループワーク** 趣旨説明および進行 山本麻起子
- 15：55－16：05 PDM 結果発表（会場とオンラインそれぞれ 1 グループから発表と質疑応答）
- 16：05－16：10 司会進行役による総括

- 16 : 10－16 : 15 閉会の辞 ADCA 企画部長
- 16 : 25－17 : 30 **第3部 ケータリング**（地球ひろば2階 J's Caféにて開催）
開始の辞 森 卓 ADCA 理事(NTC インターナショナル 代表取締役社長)
- 17 : 30－17 : 35 閉会の辞 中村友紀 日本工営株式会社 農村地域事業部地域整備部次長

3. 対象

農業開発、又は国際協力に関心のある大学生

4. 主催者

海外農業開発コンサルタント協会 (ADCA)

5. 後援者

農林水産省

独立行政法人 国際協力機構

公益社団法人 農業農村工学会

6. モデレーターおよびパネリストの略歴

モデレーター

鷲野 健二

農林水産省農村振興局海外土地改良技術室長。1993年神戸大学大学院修了後、同年農林水産省に入省。国際協力関係では、カンボジアで JICA 専門家として灌漑プロジェクトに参加し、農水省国際部で APEC や輸出促進、ジンバブエ日本国大使館で灌漑事業などの国際協力を担当。2023年に農林水産省農村振興局設計課海外土地改良技術室長に就任。現在は、農村振興・農業農村工学分野の技術交流の促進や ODA 案件形成の総合調整を担当し、多くの国との技術的な交流を促進している。

パネリスト

齋藤 之弥

日本赤十字社事業局国際部参事。バングラデシュで国際協力に触れて以来 35 年以上にわたり海外業務に従事し、農村開発、防災、緊急援助、保健医療、教育、経済政策、安全管理など多岐にわたる分野で活動。最近では主に南アジア、中東、東南アジア、アフリカ、欧州における紛争、災害、難民流出、レジリエンス強化、国際協力人材の育成と派遣に関わる業務に従事している。

山本 麻起子

㈱三祐コンサルタンツ技師。16 年以上にわたり海外業務に従事し、農村開発における市場志向型農業、ジェンダー平等、農民組織化を専門としている。これまでザンビア、エジプト、ミャンマー等における元難民の現地統合支援、持続可能な地域密着型灌漑開発、小規模農民のための灌漑開発、経済開発のための持続的かつレジリエントな養殖振興、小規模農家の市場志向型農業改善、灌漑農業収益向上等のプロジェクトに従事している。

大野 慧

NTC インターナショナル㈱技師。2018 年に JICA 海外協力隊としてガボンで野菜栽培隊員として活動。2020 年からモンゴル、ブルンジ等で農牧業バリューチェーン開発、稲作改善等のプロジェクト等に従事している。

青山 健太

日本工営㈱技師。2 年間 JICA 海外協力隊として活動し、8 年以上にわたり海外業務に従事。作物栽培、野菜栽培技術を専門としている。最近ではスリランカにおける農薬・肥料の安全適正利用促進等のプロジェクトに従事している。

7. 参加人数

会場来場 : 13 名
オンライン : 9 名
(主催者側 : 18 名)

8. パネルディスカッション

第1部のパネルディスカッションでは、ADCA 会員企業の中堅技術者3名と日本赤十字社国際部の齋藤之弥参事がパネリストとして登壇し、国際協力業界で求められる人材および能力について、以下の3つのトピックに沿ってディスカッションを行いました。

- トピック① 国際協力業界を志した理由と、在職時に感じた国際協力業界の変化
- トピック② 国際協力・農業分野で求められるスキル～学生時代に出きるコト～
- トピック③ 海外出張・駐在の醍醐味・大変さ

トピック①で、国際協力業界を志した主な理由として、「学生時代に訪れた様々な国の経験」、「多文化や地方文化への関心」、「中学高校時代にテレビで見たアフリカの飢餓問題を取り上げたドキュメンタリー」、「アフリカの貧しい子供の夢と日本人の夢の違いを描いたドラマ」などの声がありました。また、業界の変化については、「以前のような大型インフラの整備から、より現地の人々を重視した支援へシフトし、質の高い適正技術が求められるようになった」、「農業支援に留まらず俯瞰的なフードバリューチェーンの構築や気候変動を重視した技術の要求」、「地域開発に留まらず、ガバナンスなどを含めた支援体制に焦点が広がっている」、「案件は地味になってきており、より質が求められる。ドライビングシートへは現地の人々が座り、ローカライゼーションが基本になってくると思う。」等の声がありました。

鷺野氏は自身のケースでは学生から国際協力事業を志したわけではなく、農林水産省に入省後、海外転勤となり興味がわいたと語りました。また、日本のODAの予算についても言及し、金額は減少傾向が続いており、質的にはこれまでの「支援」から共存・共栄のための「協力」という流れに転じていると感じると述べました。

トピック②の国際協力・農業分野で求められるスキルについて、「農業分野は幅広い為、自分に合ったものに焦点を当てつつ、視野を広く持ち応用できるようになることが重要」、「人間力が重要であり、異なる文化の人々とのコミュニケーションには欠かせないコミュニケーション能力が必要」、「語学力、特に英語力は学生時代に培った方が良い」などの意見がありました。また、学生時代にできることとして、最も多かった意見は「海外へ渡航する」でした。その他にも「文章力を培うという観点で、本を読むだけでなく、内容を文章にまとめる習慣を持つ」、「農家でのアルバイトやファームステイ」などが挙げられました。

齋藤氏は、海外渡航では様々な要素に気付くだけでなく、「人間はどんな国でもどこも変わらない」という感覚を実感してほしいと述べました。

鷺野氏は、行政機関でも文章力は求められる能力であり、語学力も重要だと述べました。自身の経験としては、一番身につくのは海外に行くことだとし、海外で経験を積み、パーソナルレジリエンス（打たれ強さ）を培うことも重要だと述べました。

トピック③の海外出張・駐在の醍醐味として、「現地の文化に触れるのが楽しい」、「一緒に仕事をする現地の仲間と同じ目標に向かうのが楽しい」、「休みの日に様々な場所を訪れ、自分の興味関心がどんどん増えていくのが楽しみ」、「現地スタッフから聞く現地ならではの話を聞くのが楽しい」等の声がありました。

鷺野氏はこれらの体験に対し、自身の経験として「海外出張時には、日本にいたら中々気が付かない感覚を得られることがある」と述べました。

質疑応答では、会場から「海外出張でリラックスする方法」、「現地へ持っていくお土産や日本の伝統や文化について現地でよく聞かれること」、「日本が支援する形から共存や技術交流という形に変わったという話があったが、相手国が教えてもらいたい日本の技術にはどのようなものがあるか」などの質問が寄せられた。

鷺野氏は相手国が教えてもらいたい日本の技術について、灌漑排水分野では ICT による灌漑用水の自動管理技術や日本の災害、豪雨等への制度も含む対応技術などを挙げました。さらに、国際かんがい排水委員会が行っている世界かんがい施設遺産についても言及し、日本で登録されている灌漑遺産の補修や保護について海外から興味を持たれていると述べました。



鷺野氏による趣旨説明



パネリスト (左から齋藤氏、山本氏、青山氏、大野氏)



日本赤十字社の活動説明 (齋藤氏)



パネルディスカッションの様子

9. グループワーク

第2部のグループワークでは、山本麻起子技師の進行により、開発コンサルタントが技術協力プロジェクトの案件形成時に作成する計画表（PDM：Project Development Matrix）の作成を模擬的に行いました。

参加者は事前に振り分けられたグループに分かれ、配布された資料を基に簡易版のPDMを作成するための課題の選定、成果、そして実現するための活動について議論を行いました。また、オンライン参加者を含む各グループにはファシリテーターとしてADCA会員企業の若手技師やパネリストなどがそれぞれ付き、各グループを補助しました。

グループワークの最後には、オンライン・会場参加者の各1グループによる発表が行われました。発表グループはそれぞれ異なる課題を選択しましたが、活動案として農業教育を盛り込む傾向が特徴的でした。

山本氏は、オンライングループ発表者が選択した「灌漑設備の機能不全」課題に対し水利組合の体制強化に関する活動は現実的であり、実際に多くの途上国で問題となっているため、鋭い視点の活動であると評価しました。また、会場グループ発表者が選択した「衛生問題」課題について、コロナ禍において途上国で衛生管理における教育不足が深刻な打撃を与えたことを振り返り、大変重要な課題であると述べました。最後に、学生でありながら素晴らしく整った内容の計画表を作成したことを称賛しました。



グループワークの説明を行う山本氏



グループワークの様子



グループワーク発表の様子

グループワークフォーマット	
プロジェクト名	A村収入向上プロジェクト
実施期間	2024年4月～2029年3月（5年間）
対象地域	A国A村
対象者	A国A村の農家および関連官庁の役人
上位目標	本プロジェクトの取組が近隣農村で自発的に実践される
目的	対象農村の農家の収入が向上する
課題1-2項目	課題2-3項目
気候変動による農業生産性の低下	灌漑施設の機能不全
抽出した2つの課題に対する期待される成果と活動案	
▶ 成果：農業生産性の向上 ・ 活動1：気候変動に対応した品種開発 気候変動に適した品種の開発 ・ 活動2：灌漑施設の整備 灌漑施設の整備 ・ 活動3：土壌（塩類集積等）への対策 （保水能力、地力） 土壌改良により農業に役立つ土壌となる ・ 活動4：気候に対応した作物の生産 気候に対応した作物が栽培される ・ 活動5：栽培方法の教育 農家が最適な栽培方法を習得する ・ 活動6：品種の選定活動 品種についての理解が深まり、栽培されるようになる	▶ 成果：灌漑施設の機能改善 ・ 活動1：雨季の雨水を貯水する施設 雨水が貯水され、農業利用される ・ 活動2：維持管理に向けた技術教育 技術教育により、適切な維持管理が行われる ・ 活動3：水利組合の維持管理のためのシステム作り、刈小等の教育 水利組合が機能し、灌漑施設が管理される

オンライン参加者が作成した PDM

10. ケータリング

第3部では、海外の料理を楽しみながら参加者との交流が行われました。森卓 ADCA 理事による開始の挨拶の後、食を通じ、パネリストや現役コンサルタントと学生との交流が行われました。



11. 参加者の感想（抜粋）

- 授業で学ぶより具体的で実践的なことを学ぶことができた。
- 国際協力に関するセミナーに参加したのは初めてでした。自身の研究にも重なる部分があり、勉強になりました。
- 多くの関係者の話を聞くことができ、非日常的な空間に大いに満足することができました。
- 実際に海外で働いている方のお話を聞くことができ、勉強になった。
- 異なる経歴を持つ方々がいらっしゃり、非常に親身になって相談に乗って下さった。
- （第3部ケータリング）どれもとても美味で、海外への希望を深めさせてくれるような内容でした。
- （第3部ケータリング）いろんな方とお話しでき、おいしい料理をいただけたからです！
- もう少し各々の仕事について知りたかったという気持ちもあります。
- グループワークにもう少しじっくり取り組む時間があると良いと思う。
- 内容がとても面白く、自分にはない考えを得ることができた。しかし、オンライン上でのグループワークは少し難しく感じた。
- オンラインで参加したが、最初の1時間ほど音声聞き取りにくかった。
- とても勉強になる話ではあったが、会場の音声をスピーカーで拾い流す形であったため、マイクの反響や音割れ等があり、話が聞き取りづらかった。

12. 総括

今年度で14年目となる本セミナーは、農業、農業農村工学、経済学、国際開発等の様々な専門分野の方々にご参加いただきました。パネルディスカッションやグループワークを通じて、農業開発の魅力を感じてもらうことができました。

事後アンケートでは、回答者16名中11名が「満足」、3名が「やや満足」、2名が「どちらともいえない」とセミナー全体を評価しました。しかし、オンライン参加者からは「セミナー前半の音声聞き取れなかった」との意見も多数あり、次回の開催時には音声や配信画像に関する綿密なリハーサルを行うことが課題です。また、第2部のグループワークについて、オンライン上での操作が難しかった点やもう少し時間に余裕があった方が良かったなどの意見も寄せられました。これらの意見も踏まえ、当協会は今後も引き続き、海外農業農村開発に関心のある学生や若い世代に国際協力に携わることの魅力を感じてもらえるよう、尽力していきます。

今回のADCAセミナーの開催にあたり、ご協力いただいた農林水産省、農業農村工学会、JICA、そして、海外技術協力に係る豊富な知識と経験を駆使して本セミナーを成功に導いていただいたパネリスト、セミナー運営メンバーおよびファシリテーターの若手技術者の皆様、そして何よりご参加いただいた学生の皆様に心より感謝申し上げます。